

## 戯曲で〈何〉が表現できるのか

土田英生

今年の最終候補作は特にバラエティに富み、それだけに選考に際して比較することの難しさがあった。自分自身の好み、また、得意不得意をどのように乗り越えて他者の書いた作品に向き合えばいいのか。賞の選考に公平な姿勢で臨もうとする意志と、主観での判断からは逃れられない事実を実感した。それだけに他の選考委員の皆さんの意見に耳を傾けることが助けになった。

まずは大賞の中辻英恵さん、佳作の竹田モモコさん、おめでとうございます。

中辻英恵さん『初心者のための永遠』に関しては、ト書き、台詞、登場人物の選び方などの表現に作者の「確信」を感じられはしたものの、意図されたことを汲み取りきれないもどかしさがあった。いくら読んでも個として主張することへの諦念や社会と同化することへの願望、特に少年がイワシの群れに憧れて最終的に入れ替わってしまっていく様などに後味の悪さを覚えてしまい積極的な評価ができなかった。他の選考委員の話に随分と認識を改めさせられた。

竹田モモコさん『川にはとうぜんはしがある』は“一見”とても理解しやすい。それだけに戯曲の中にある小さな矛盾までもが発見できてしまう。それらは私自身が戯曲を書く際に陥る問題と似ている気がして、最初はやや厳しい視線で読んでしまったように思う。ただ、読み返す度に全体としてとてもよくできていることに感嘆し、最後はこれを大賞に推した。作者にドラマが風景としてしっかり見えているからこそ書けた作品だと思う。

久野那美さん『それは、満月の夜のことでした』。短い一人芝居だが、イメージの転がし方や食パン工場などのエピソードも魅力的で、なにより言葉がとても丁寧に選ばれている作品だった。この長さの戯曲でこれだけ世界に引きずり込める力は相当なものだと思う。

武田繰美さん『蛇含草ホテル』。一読してとても興奮した。落語の話をうまく使い、突飛な展開まで用意しながら、その底には普遍的な過去と現在の人々の群像が描かれているのもいい。具象と抽象のバランスがよく、なによりとてもよく出来ている。私は当初はこれが頭一つ抜けていると考えていたが、佐藤信さんから指摘があった「孤独死を蛇含草で例えることの問題」が大きくひっかかってしまった。

田辺剛さん『留守』。とにかくこの人は手だれの劇作家だと思う。既視感のある題材であるにもかかわらず、一本の芝居として見応えのあるものに仕上げる。ただ、今、ここで起きる登場人物の関係にドラマが足りない印象だった。最後、共に逃げようということになるのであれば、その動機に至る軸が欲しかった。

田宮ヨシノリさん『くじらのいびき』。会話の運び方、台詞の筆致もとてもよかった。淡々と進むやり取りの中での事情の隠し方もいい。過去と現在、引きこもりになっている女1とクジラのイメージのリンクもいい塩梅だと思った。ただ、登場人物が二人の時はいいのだが、増えた時に会話が人物のモチベーションを離れて乱れてしまうのと、全員が同じようなトーンに感じられてしまうのがもったいないと感じた。

水上宏樹さん『たった一人の。』芝居に夢を見た高校生の頃、そして大人になってからの現実を描いている作品。ラストが夢オチなのか、もしくは時間が戻ったのか、とにかく二重構造になっているのだが、高校生の時の会話をもう少し丁寧に紡ぐ必要があったように思う。

世界中で明らかに社会が閉じはじめている中、戯曲でなにが表現できるのか。そして同時に創作の世界には急速にAIが入り込んできている。これから劇作家とはなにかがますます問われる。みなさん、頑張って書いていきましょう。